

ズールー・ナショナリズムにおける「曖昧さ」の縮減

—1930・40年代のズールー語教科書出版における 白人行政官と保守的ズールー知識人の協調—

上林 朋広

はじめに

1. 問題設定

本論文は、1930年代から40年代にかけての南アフリカ・ナタール州（現クワズールー・ナタール州）のアフリカ人教育におけるズールー文学・歴史教育を分析することで、同期間のズールー・ナショナリズムの内容とその広がりをも明らかにする。具体的には、学校教育で使用されたズールー語の教科書と、シラバス及び試験問題など教科書の読み方を規定したと考えられる史料を用いることで、原住民教育主任視学官であったダニエル・マック・マルコム（Daniel Mck. Malcolm）を中心としたナタール州教育行政と保守的なズールー知識人の協力のもとで生み出されたズールー語の歴史叙述が、人種隔離政策と親和性を持つようにズールー・ナショナリズムを特定の形態へと導こうとする試みであったと主張する。

20世紀前半におけるズールー語の歴史叙述の果たした役割については、研究史上大きく分けて二つの立場がある。一つは、ズールー・エスニシティを強調した保守的知識人とアフリカ人統治に関わった白人行政官の協力体制に焦点を当て、彼らが人種隔離政策を正当化したという側面を強調する立場である⁽¹⁾。他方は、ズールー人の歴史叙述、特に歴史小説を分析対象として、植民地支配への抵抗の可能性を見出す立場である⁽²⁾。前者の観点を打ち出したシュエラ・マークスの論文は、ナタール州のアフリカ人教員団体ズールー・ソサエティが、家父長的で植民地支配に融和的なズールー・エスニシティ観を提示したと主張する。しかし、その分析の射程は、アフリカ人統治行政とアフリカ人知識人の協力関係を対象とするにとどまっており、学校教育で使用された具体的なテキストを対象としているわけではない。一方で、文学研究者ビキ・ピーターソンに代表される後者の立場は、テキストの内容にのみ焦点を当て、分析対象とする書物が学校教育で学生に特定の価値観を教えるために利用されたという側面を等閑視してきた。上記の研究動向に対し、本論文では、学校教育現場を中心としたズールー人の歴史について読み・書くという行為が、共同体としてのズールー人のあるべき姿を提示してきたという観点から、ズールー語による歴史叙述を分析する。具体的には、ズールー・ソサエティの史料、特に同協会の事務局長を務めたチャールズ・ムパンザ（Charles Mpanza）とマルコムの間で交わされた書簡を検討することを通して、教室において学生がズールー語で執筆された教科書を読むという行為に、特定の社会的規範を教え込む役割が期待されていたことを明らかにする。

2. 先行研究と本論文の視角

南アフリカは1980年代後半から90年代前半にかけてアパルトヘイト体制から全人種の政治参加を可能とする民主体制へ移行した。この政治体制の移行は平和裡になされた「奇跡」と称される

こともあるが、実際には、アパルトヘイト体制への主要な抵抗団体であるアフリカ民族会議(ANC)とズールー人ナショナリスト団体インカタ自由党(Inkatha Freedom Party)が苛烈な主導権争いを繰り広げ、「内戦」とも言える状況が生じていた。2万人以上が死亡した⁽³⁾とされるこの対立の原因を解明するという動機を一つの背景として、ズールー・ナショナリズムに関して膨大な研究が蓄積されてきた。それらの研究群は、大別すると19世紀後半から1920年代までを対象とした間接統治の形成と、統治におけるズールー王家を中心とした「伝統」の役割⁽⁴⁾、1970年代以降のインカタ自由党、特に同党党首でありズールーランドの宰相であったマンゴスツ・ガッチャ・ブテレジ(Mangosuthu Gatsha Buthelezi)の影響力の分析という二つの動向としてまとめることができる⁽⁵⁾。しかし、これまでの研究では本論文が対象とする1930年代から40年代という時期には注意が向けられてこなかった。そこで本論文はまず、1930年代及び40年代を対象とする際の二つの視点を提示し、先行研究への貢献を明確にする。第一に、1930年代及び40年代のズールー・ナショナリズムを、20年代までに形成されたズールー・ナショナリズムの特定の形態が人口に膾炙していく時代として捉えることができることを示す。第二に、ズールー・ナショナリズムの媒介過程に関する研究に対して、本論文は学校教育をナショナリズムが制度化されていく際の回路として明示する。

2.1 30年代・40年代のズールー・ナショナリズムをどう捉えるか

20世紀前半のズールー・ナショナリズムを対象とした研究は主として、1900年代から20年代を対象としてズールー王家の象徴的機能を分析してきた。例えば、人頭税への反対から生じた1906年のバンバタの反乱におけるズールー王の糾合性に注目したマホニーの研究⁽⁶⁾や、1920年代のナタール州及びズールーランドにおける労働組合、産業商業労働者組合(Industrial and Commercial Workers Union, ICU)の運動を分析したブラッドフォードの研究⁽⁷⁾を挙げることができる。しかし、上記の研究が示すズールー王の反植民地主義運動における象徴という大衆的な期待に反して、1920年代にズールー王であったソロモン(Solomon kaDinuzulu)自身は、アフリカ人統治行政が割り当てた役割を積極的に担っていった⁽⁸⁾。それゆえに、ズールー王家は、抵抗の象徴ともなり、また植民地統治のモデルともなるという、両義性を持ってきたのである。

シューラ・マークスは、ズールー・ナショナリズムに関する影響力の強い研究において、先述のソロモン、ANC初代議長ジョン・デュベ(John Dube)、及び労働組合運動家であったA.W.G.チャンピオン(Champion)という伝統的権威、ミッション・エリート、そしてズールー人政治家の代表的人物の生涯をたどることで、植民地主義のもとでアフリカ人エリートは彼らの望みを、支配者によって設定された言説によって表明すると指摘する。ズールー人であるという真正性をめぐって議論することが、彼らの希望を明確な植民地主義への反逆と思われない範囲内で要求する手段であったのだ。マークスは、アフリカ人エリートのこのような性向を「依存の曖昧さ(ambiguities of dependence)」と名付けた⁽⁹⁾。本論文は、まず学校教育において教科書として使用された歴史書・歴史小説を分析することで、この両義性を、教科書の歴史叙述も含んでいくことを明らかにする。

ただし、マークスの議論には問題点も存在する。「曖昧さ」として括られる行為の範囲があまりにも広いと、植民地主義下のアフリカ人の行動のすべてが、「曖昧さ」という概念に含まれてしまうように見えるのである。この問題を克服するためには、これまで研究がほとんどなされ

てこなかった30年代以降に注目する必要がある。30年代初頭までに、それまでズルー人を糾合する象徴的存在として考えられてきたソロモン王は死去し、またICUなどの急進的な労働団体は政府の強権的な抑圧によって活力を失った。30年代に入った時に勝利したのは、マホニーやブラッドフォードが描いた下からの急進的なズルー・ナショナリズム⁽¹⁰⁾ではなく、ズルー人の保守的エリートと白人行政官の協調によって上から生み出された官製ナショナリズムとしてのズルー・ナショナリズム⁽¹¹⁾であった。反アパルトヘイト運動の起源や、70年代以降のズルー人保守的政治家ブテレジの率いるインカタ自由党に研究が集中したこともあり、少数の例外を除いてこの時期のズルー・ナショナリズムに関する研究は存在しない。しかし、本論文が示すように、特に学校教育や文学においてはむしろ30年代以降にズルー・ナショナリズムをめぐる議論が活発化したことに注目するならば、30年代及び40年代をズルー・ナショナリズムの教育を通じての浸透の時期として捉えることができるだろう。さらに、学校教育においてズルー・ナショナリズムが提示される過程においては、マルクスが述べた「曖昧さ」がむしろ縮減された。それゆえに流通面においてだけでなく、その内容面においても30年代・40年代はズルー・ナショナリズムを論じる上で重要な時期であると考えられるのである。

2.2 ズルー・ナショナリズムの媒介過程

ズルー・ナショナリズムの広がり注目した研究は、数としては少ないが、それぞれ重要な論点を提示している。それらを列挙するならば、第一にヨハネスブルクでの鉱山労働で他民族と接触することによって、それまで自身の「部族」的アイデンティティしか持っていなかったズルー語話者の労働者がズルー人としてのアイデンティティを認識するようになり、彼らが帰郷することでズルーランド及びナタールに住む人々にもズルー人としての自覚が広がったとする先述のマホニーの研究⁽¹²⁾、第二にズルー語新聞がズルー人の歴史を論じる公共圏として機能したとするシヨニパ・モコエナの議論⁽¹³⁾、第三にズルー王の役割を強調した演説を行い、王と民衆をつなぐ媒介的役割を果たしたズルー人知識人の活躍を詳細に描いたラ・オッセの研究を挙げることができるだろう⁽¹⁴⁾。しかし、意外なことに上記の研究のいずれも学校教育に触れていない。確かにナタール州のアフリカ人教育史に関する史料状況を整理したカラウェイの論文が述べるように、ナタール教育省の原住民教育に関する史料はまとまったものとしては残されていないため⁽¹⁵⁾、アフリカ人教育の実際の状況を明らかにすることは非常に困難である。しかし、アフリカ人教育がアフリカ人統治行政に関わる白人官僚とミッション・エリートの折衝の場として機能し⁽¹⁶⁾、また第2節で述べるようにズルー人がズルー語で書いたほぼすべての書物が学校教育において使用されることを念頭に書かれたことを考えるならば、白人行政官、ズルー王家、ならびにズルー人保守的エリートとズルー語話者の大衆をつなぐズルー・ナショナリズムの媒介経路としてアフリカ人教育を無視することはできない。

また学校教育に注目することは、ズルー・ナショナリズムの広がり歴史展開における1930年代・40年代の時代的特徴を把握する上でも重要である。すなわち先述した1906年のバンバタの反乱や20年代に活発化したICUに見られる下からのズルー・ナショナリズムの発露が「うわさ」を主な媒体としていたのに対して、白人行政官とズルー人保守派を中心として形成された上からのズルー・ナショナリズムは、学校教育、特にズルー文学・歴史という科目を重要な媒介経路としていたのである⁽¹⁷⁾。さらに、後の時代とのつながりにおいては、ズルー語教

科書出版に携わった白人行政官・ズルー人教員が初期のズルー語ラジオ放送にも関わっていた点を指摘できる。第二次大戦へのズルー人の動員を目的として開始されたズルー語放送の設立には、本論文で検討するズルー人教員団体ズルー・ソサエティが携わり、ズルー王家のみならず、チャーチルやスマッツなどイギリス帝国の指導者の頌詩（イジボンゴ）を放送することで、第二次大戦への士気を高め、ズルー人からの協力を得ることを画策した。またアパルトヘイト期にはアフリカ人の分断を目論み、民族意識の高揚を目的として放送されたズルー語ラジオ番組の主要なプログラムの一つは歴史物語であった。このように考えるならばズルー語ラジオ放送は、ズルー語教科書を読むリテラシーを持たない人々にも政府公認の歴史観が広がっていく過程として捉えることができるだろう⁽¹⁸⁾。本論文は、ズルー語教科書の出版及び利用を検討することで、1920年代に下からのナショナリズムへの対抗を要因として、白人行政官・ズルー王家・ズルー人保守的エリートの三者によって形成された上からのナショナリズムが、学校教育によって制度化され、その後大衆に広がっていく基礎が築かれたと主張する。

学校教育という観点からズルー・ナショナリズムを分析するにあたって、筆者が、ズルー・ソサエティ文書の中に事務局長をしていたチャールズ・ムパンザのソサエティとは直接の関係がない個人文書も含まれていることを発見したことは幸運であった⁽¹⁹⁾。自身教員でもあったムパンザの文書は、彼が原住民教育主任視学官のマルコムとともにズルー語に関わる試験問題を作成し、またズルー語で書かれた教科書の原稿を選定する作業にも関わっていたことを明示する。それらの史料は、作成された年代が限られており、アフリカ人教育行政全体から見ればほんの一部であることは確かだが、ズルー文学・歴史教育の実践という点においては非常に明瞭な視座を提供するものである。本論文は、これまでの研究においては利用されていなかったムパンザとマルコムの史料を利用することでズルー・ナショナリズムの浸透の過程を跡付ける。

以上の目的を達成するために本論文は、まずズルー人がズルー語を学校教育において学ぶとはどのような歴史的な問題系に位置付けられるのかを、本論文で使用する史料の紹介も兼ねつつ説明する（第1節）。その上で、1930年代以降のズルー文学・歴史という科目における教科書の出版経緯をたどることで、ズルー語で書かれた文学書及び歴史書への教育行政の介入とその帰結を明らかにする（第2節）。最後に、実際の教室において教科書がどのように読まれることを期待されていたかを試験問題から明らかにすることで、ズルー・ナショナリズムが持っていた「曖昧さ」が縮減される過程を論じる（第3節）。

第1節 ズルー語で書き・読むという経験

“I feel rather nervous and my bones ache to the marrow when I start to write to disclose the secret of our clan. On several occasions I desired to write about the history of our clan, but nervousness and fear always overwhelm me and I felt it as bad job. But I have acquired some courage today, because a thought came into my mind and reminded me that the present government holds no grudges over past events.”（私の氏族の秘密を暴露するために書くのだと思うと、私はすごく不安になり、骨の髄まで痛むのを感じる。幾度も私は私の氏族の歴史について書こうとした。しかしその度に不安と恐れが私に取り付き、これはひどい仕事だと感じるのだ。しかし今日、

ある考えが浮かび、政府は過去の出来事に不満を持っていないだろうと私に思い起こさせたので、いくらかの勇気を得たのである。⁽²⁰⁾

1942年にイギリス系白人女性でアフリカナ（アフリカに関する様々な資料）の収集家であったキリー・キャンベル（Killie Campbell）によって開催されたズールー歴史エッセイ・コンテストに応募された一つのエッセイの書き出しである⁽²¹⁾。ズールー人の知られざる歴史を明らかにし、記録として残したいという主催者側の意図を汲んだ魅惑的な書き出しである。ただし、このエッセイの書き出しは、他の応募エッセイと比較すると確かに飛び抜けて劇的ではあるが、審査官であるナタール州住民教育主任視学官であったダニエル・マルコム⁽²²⁾の意図を汲んで執筆するという点では特別であるわけではない。

このエッセイの作者であるサベロは1950年に開催されたエッセイ・コンテストにも応募している。彼は二つのエッセイを提出し、そのうちの一つは次のように始まる。“Ngishaywa uvalo kuqaqamba [sic. kuqaqamba] onke amathambo omzimba wami, lapho ngicabanga ukuthi namhla ngizoloba ngidalule obala isifuba sesizwe sakithi.”（私は不安に打たれ、体の骨の全てが痛む、今日私は書くことによって、私たちのイシズエ（「氏族」）の秘密を明らかにしてしまうのだと思うと）⁽²²⁾ この一文からサベロが先に挙げた1942年のエッセイを英語からズールー語に逐語訳的に訳して、新たなエッセイとして提出したことがわかる。サベロはこのエッセイに手紙を付して、エッセイの提出が遅れたことをマルコムに詫言っているが、なぜ8年の時を経て全く同じ内容のエッセイをズールー語で提出したのかは明らかにしていない⁽²³⁾。しかし、サベロの英語からズールー語へと言語を変えて歴史を書くという行為は、1912年、42年、50年とかなりの期間をおいてであるが、実施された歴史エッセイ・コンテストにおいてズールー語による記述が大幅に増えるという傾向を反映している⁽²⁴⁾。そして、エッセイの記述言語のズールー語への変更は、マルコムが主任視学官として関わってきた住民教育改革における母語（ズールー語）の教授言語としての重視という方針が、実際に効果を及ぼしていたことを明らかにする。ここで問題となるのは、ズールー語を母語とするズールー人が、学校教育においてズールー語を学ぶことは、どのような点で植民地統治行政と結びついていたのかという点である。

筆者は、先に挙げたサベロのズールー語によるエッセイの書き出しを、辞書を引きながらゆっくりと読んだ。ズールー歴史エッセイ・コンテストの審査官であるマルコムも編者に名を連ねる辞書である⁽²⁵⁾。ズールー語で読むこと、そして書くことも、マルコムのようなアフリカ人統治行政と深く関わり、その中でズールー語やズールー文学に関する仕事をしてきた人物の存在を抜きにしては語ることができない。本論文は、ズールー語で歴史や文学を書き、読むという行為を、アフリカ人教育行政におけるズールー史・文学の役割という観点から考察することで、官製ナショナリズムとしてのズールー・ナショナリズムの浸透の過程を明らかにすることを意図している⁽²⁶⁾。

サベロの作文の事例から分かるように、アフリカ言語で書くことが精神の脱植民地化につながるとするケニアの文学者グギ・ワ・ジオンゴの主張⁽²⁷⁾とは反対に、ズールー人が自身の言語で書くことは、自分の文化を守り、植民地支配に抵抗の姿勢を示すことに単純にはつながらないものである。ズールー語で読み、また書くことは、自身の文化を保ちたいというズールー人知識人のナショナリズムが植民地主義に分かちがたく結びついていく過程であったのだ。

本論文の以下の部分ではこのナショナリズムとコロニアリズムのもつれをズールー文学・歴史という科目を中心に考察する。

第2節 学校教育におけるズールー語文学とズールー語による歴史叙述

1. ズールー語を中心とした教育改革：ロラムからマルコムへ

本節では、ズールー語文学・歴史というアフリカ人教育の一教科の分析を通して、1930年代・40年代に白人行政官とズールー人保守的エリートが、いかにして特定の形態のズールー・ナショナリズムを教員予備軍の学生に、また広く大衆に浸透させようとしたのかを跡付ける。そのために本節ではまず、言語としてのズールー語、及びズールー文学・歴史がアフリカ人教育において、どのような意義を持つ科目として構想されたのかを確認した後、同教科で教科書として使用された歴史書及び小説を分析する。

ズールー語を教えること、また他の科目においてズールー語を教授言語とすることは、1917年からナタール州原住民教育主任視学官に就任したチャールズ・ロラムが提示した教育改革によって推進された⁽²⁸⁾。教育学者としてのロラムは、南アフリカにおけるアフリカ人教育において、アメリカ南部の黒人教育のモデルを持ち込んだことで有名である。しかし、彼の教育改革はアメリカ南部黒人教育で強調されていた農業や工業など実業教育とともに、教授言語としての母語を重視するものであった。

ナタール州におけるアフリカ人教育改革は、ロラムがその著書『南アフリカにおける原住民教育』において提示した構図を基本として推し進められた。アフリカ人教育においてロラムが問題視したのは、アフリカ人学生のヨーロッパ人学生またインド人学生と比較した際の成績の低さであった。ロラムはこの事象を説明するにあたって、アフリカ人の知能が生物学的理由によってヨーロッパ人学生よりも低いとする優生学者の見解を否定し、学校教育で教えられる内容がアフリカ人学生の生活からかけ離れたものになっていることが原因であると主張する⁽²⁹⁾。そのため、ロラムの教育改革は、アフリカ人社会の現状に教育内容を適合させる(“adapted”)ことを主眼としていた。ロラムは、大部分のアフリカ人は本来的には定められた居留地に居住すべきであるという前提から出発し、アフリカ人教育は、農業、工芸とともにズールー語を含めたアフリカ人の母語により重点を置くべきであると指摘した⁽³⁰⁾。

ロラムはアパルトヘイト初期のアフリカ人教育制度の基礎を築いた1953年のバンツール教育法につながる教育思想を提示した教育学者として多くの研究の対象となっている。しかし、1920年にヤン・スマッツ首相(Jan Smuts)によって設立された連邦政府の諮問機関である原住民問題委員会(Native Affairs Commission)の委員に就任し、プレトリアに居を移したこともあり、教育官僚としてのロラムの役割はナタール州におけるアフリカ人教育改革の青写真を提示した点に限られていた。彼が描いた構図を実行に移す役割は、ロラムの後任として原住民教育主任視学官に就任したマルコムに引き継がれたのである⁽³¹⁾。

しかし、マルコムは、単にロラムの「社会に適合的な教育(adapted education)」や政府による教育の管理の拡大という主張を引き継いだだけではなかった⁽³²⁾。ロラムが母語の重視を論じる際には、母語を使用することでアフリカ人学生が、教育内容をより深く理解できるようになるという側面に重点があった。それに対して、ロラムの後継者であるマルコムは、ズールー語の教

授、及びズールー文学・歴史という科目が、「人種的な誇り (racial pride)」を保つという役割を担うべきであるという議論を持ち込んだのである⁽³³⁾。

2. ズールー語著作の不足：白人の著作と翻訳による対処

ズールー語での授業を円滑にするとともに、伝統を伝え、人種的誇りを保つことに目的が拡張されたズールー語・歴史・文学という科目がまず直面した課題は、教科書として使用できるズールー語で書かれた書物が不足していることであった。19世紀初頭以来のミッション教育の伝統を誇り、出版局を内部に抱えるラヴデール校など有力校を有するケープ植民地においては、ズールー語と同ジングニ (Nguni) 系の言語であるコーサ語での読本の出版が積極的に行われていた⁽³⁴⁾。それに対して、ナタール州のズールー語教材に関しては、各宣教団体において教材が作成され使用されてはいたものの、1932年の時点において言語学者 C. M. ドーク (Doke) が述べるように、ズールー人の歴史や伝統に関するズールー語著作は非常に限られていた。ドークはズールー語文学における主要な著作としてあげることができるのは、ジョン・デュベによるシャカの想像上の従者を主人公とした歴史小説『ジャッケ：シャカの従者』のみであると指摘する⁽³⁵⁾。また各宣教団体が使用していた教材も、キリスト教の布教や生活指導に重点を置いており、ズールー人の伝統を教えたいと考えていた教育省の立場からは不十分なものであった。実際に、1932年に開催された大学間アフリカ研究会議のアフリカ言語に関する部会において、ドークは、ズールー語による著作がほとんど見られない現状を嘆いている。その上で、ズールー人自身によるズールー人の歴史を対象とした著作の執筆を促すことも必要であるとしながらも、早急に学校教育での利用に資するために翻訳書を利用することを提案している。具体的には、ソト人であるトマス・モフォロ (Thomas Mofolo) がソト語で執筆した歴史小説『シャカ』のズールー語への翻訳を勧めている。また同じ会合においては、マルコムも、教科書用に「ズールー人の歴史」がズールー語で書かれるべきだと主張している⁽³⁶⁾。

ズールー語教材利用の歴史において、1930年代は白人宣教師や行政官がズールー語で書いた読本や、英語で書かれた本のズールー語への翻訳本が優勢を占めていた状況から、教育行政の介入によってズールー人がズールー語で書いた本がそれらに置き換わっていった時期であると捉えることができる⁽³⁷⁾。この変化を捉えるためにまず白人行政官執筆のズールー語読本及び英語からの翻訳本が優勢を占めていた1930年代初頭の状況を説明しておきたい。

コーサ語やソト語など南アフリカの他のアフリカ言語と比較して、ズールー語で書かれた著作が少なかったため、30年代前半までのズールー語・文学の教育科目においては、ズールーランドの白人行政官ジェイムズ・スチュアート (James Stuart) による読本や、翻訳本が多く利用されていた。スチュアートの読本は、彼がズールーランドの行政官 (magistrate) としてアフリカ人と関わる中で収集したインタビュー、回顧録や民話に基づいている⁽³⁸⁾。これらの読本は、学生をズールー語で読むことに慣らすという目的で使用されただけでなく、19世紀のズールー人の歴史を教えるための教材としても利用された。初等教育用のシラバスは、ズールー語の授業時に、スチュアートの読本に基づいて教員がズールー人の歴史を教えるように促している⁽³⁹⁾。具体的には、教師はスチュアートの執筆した『ヴセザキチ (uVusezakiti)』と『トゥラシズウェ (uTulasizwe)』の二つの読本の中の歴史を扱った項目に依拠して学生に説明するようにと指示している。1931年のナタール州のアフリカ人教育に関する統計では、『ヴセザキチ』と『トゥラ

シズウェ』を歴史教科書として使用するよう指定されているスタンダード3及びスタンダード4の学生数は、それぞれ3,244名、2,224名となっている。一方で、歴史という科目が始まるスタンダード3以前の学生に対しては、教師がスチュアートの教科書の内容に基づいて学生に話をするように求めており、その学生数は、Infant Class 1が21,468名、Infant Class 2が8,741名、スタンダード1が6,706名、スタンダード2が4,195名となっている⁽⁴⁰⁾。教員や事務員の予備軍である高学年の学生の読本としてだけでなく、なんとか文字が読める程度の低学年の学生にも教師がその内容を語ることを求めることで、ナタール州におけるアフリカ人教育においてはスチュアートの歴史教科書に代表されるズルー王家を中心とした歴史観の大衆への浸透が意図されていたことが分かる。

翻訳本の例としては、ライダー・ハガード (Rider H. Haggard) の冒険小説『ナダ、百合の女性 (Nada, the Lily)』がズルー語に翻訳され、教科書として使用されている。現在はイギリス帝国主義を称揚する扇情的な冒険小説として語られることが多いハガードの小説が利用されていたことは意外なことと思われるかもしれない⁽⁴¹⁾。しかし、20世紀前半においては南アフリカのアフリカ人知識人の間でハガードの小説の人気は高かった。特に想像上のズルー人ウンプロガース (Umplogaas) を主人公として、彼の妹でシャカの妻となるナダを題名にした歴史小説『ナダ』の影響力は強く、アフリカ人知識人が自身の小説を書く際のモデルになったとも指摘される。例えば、文学史研究者であるコーンは、『ナダ』のズルー語翻訳へ序文を寄せたデュベ自身の小説『ジャッケ』も『ナダ』を念頭に置いて執筆されたと主張する⁽⁴²⁾。ハガードの『ナダ』が影響を与えたのはズルー人による著作だけではなく、ブライアン・ウィランは、2018年に出版したソト人の政治活動家ソロモン・プラーイキ (Solomon Plaatje) に関する新しい伝記の中で、プラーイキが英語で書いた小説『ムーディ (Mhudi)』が、その文体においても、また物語の構成においても『ナダ』に類似していると指摘している⁽⁴³⁾。

キャロライン・ハミルトンは、『ナダ』について、ハガードが、シャカを有能な指導者として描きながらも、その冷酷さを強調していることを指摘し、この描写が、彼がこの本の献辞を捧げたナタール植民地初代原住民政務長官セオフィラス・シェップストーン (Theophilus Shepstone) の政策を裏書する役割を果たすものであったと述べる。すなわち、この小説は、ズルー王家の冷酷な統治がイギリスによる介入を正当化する一方で、シェップストンのアフリカ人統治政策が正統な統治としてのシャカの伝統に基づくものであると暗示するのである⁽⁴⁴⁾。

しかし、ハガードの小説が影響力を持っていたからといって、アフリカ人エリートがイギリス帝国主義を無批判に受け入れていたと短絡することはできない。アフリカ人エリートによるハガードの読解には、南アフリカにおけるミッション・エリートという立場からの小説の含意の読み替えが伴ったのである。実際に、法廷通訳者 F.L. ンツリー (F.L. Ntuli) による『ナダ』のズルー語翻訳書においては先述したズルー人教育家のデュベが序文 (Isishayelelo) を書いているが、その中でデュベは、ハガードの小説をズルー人の強靭さを表すものであるとして捉え直すことを試みている⁽⁴⁵⁾。デュベは、この本によってハガードはズルー人である「私たちが本当に強靭であると、私たちの力強さを賞賛し、激賞している」と書いているのである⁽⁴⁶⁾。

アフリカ人の登場人物の名前をより真正なものに置き換えるなど細かな変更はあるものの、ンツリーの翻訳は基本的には、原文に忠実に沿ったものである。内容に関わる唯一の大きな変更は、献辞の簡略化とイントロダクションの省略である。しかし、この削除・縮約は、小説の意味づけ

を大きく変えるものであった。ハミルトンが主張するように、原著でのシェプストンへの献辞が、シェプストンが築いたシャカのイメージを利用した統治体制の正当性を確認する役割を果たしていたとすれば、その献辞を取り除くことは、この翻訳の焦点をシャカの時代そのものへと向ける行為であった⁽⁴⁷⁾。ハガードの原著序文は、白人農夫にアフリカ人の呪術師が物語るという図式を提示すると同時に、語り手である呪術師のエグゾティシズムを強調するものでもあった⁽⁴⁸⁾。それに対して、翻訳本では、語りの構造の紹介は、デュベの前書きの中の一文に圧縮されており、黒人の語り手が白人に物語るという構造を説明するにとどまっている⁽⁴⁹⁾。このように原文の献辞と序文を取り除いた上で、デュベの前書きを備えた翻訳書は、ズルー人のためにズルー人が語る、ズルー人の勇敢さを讃えるための物語としてこの本（『シャカの支配 (Umbuso kaShaka)』として訳された）を読むことを可能にするものであった。『ナダ』は翻訳という過程を経ることで、ヨーロッパ人読者に対しアフリカというエキゾチックな場所での冒険を物語る小説から、ズルー人読者にズルー人の勇敢さとその歴史を伝える教材へと変化したのである。

3. ズルー語教科書への教育行政の介入

ズルー語で書かれた教科書が不足している状況を改善するためにナタール教育省は、ズルー地域土着語委員会 (Zulu Regional Vernacular Commission) を設立し、ズルー語で書かれた原稿を募集した⁽⁵⁰⁾。委員会のメンバーは、マルコム他に、宣教師で聖書のズルー語訳をナタール州原住民教育省が発行するアフリカ人教員向けの雑誌『原住民教員雑誌 (Native Teachers' Journal)』に連載していた宣教師のスター (Rev. Suter)、ノルウェー人宣教師の息子として生まれ、ダーバン郊外のアフリカ人エリート校であるアダムズ校の教員を務め、ズルー歴史エッセイ・コンテストの応募作品の英訳も行った E. R. ダール (Dahle)、原住民教育視学官 S.B. チューニセン (Theunissen)、そして唯一のアフリカ人メンバーとしてヴィッツ大学でズルー語の講師であったシブシソ・ニャンベジ (Sibusiso Nyembezi) から構成されていた。この委員会は当時のナタール州が誇るズルー語の権威を結集したものであった。ズルー語文学・歴史の教材においてズルー人作家の作品が白人の著作に置き換わっていく背景には、州政府の介入があったのである⁽⁵¹⁾。

アフリカ人の中での識字率⁽⁵²⁾の低さゆえに、ズルー語で書かれた書物の場合、出版して採算の取れる一定数の読者を確保することは極めて困難であった。それゆえ、1949年の段階におけるズルー語文学の現状を整理したマルコムの論文が述べるように、教科書として採用される見込みがなければ、ズルー語で書かれた本を出版することは難しかったのである⁽⁵³⁾。上記の理由により、ズルー語・ズルー文学及び歴史という科目において使用される教科書の選定・出版の過程を分析することは、アフリカ人教育に関する思想、特にその中でズルー語・文学・歴史の果たす役割に対する期待が、出版される本の内容をいかに規定してきたのかを理解することにつながると考えることができる。アフリカ人作家の作品を出版史的な観点から検討してきた研究の多くは、アフリカ人の著者と宣教団の出版局との関係を対象として、いかにして宣教団の意図が出版される本の内容に影響を与えてきたかを明らかにしてきた⁽⁵⁴⁾。しかしアフリカ人教育政策の大枠を主導する存在が、1930年代までに宣教団から教育学者や人類学者あるいは行政官など世俗の専門家に移ったという教育史家クリゲの主張が正しいとするならば⁽⁵⁵⁾、いかにしてマルコムに代表される政府及び世俗の専門家がアフリカ言語の著作の出版に介入したのかを明らか

にする必要がある。この点においてナタール教育省が主導した教科書としてのズールー語著作の出版は、教育行政のアフリカ言語作品への介入の具体的な事例として重要性を持つのである。

それでは、教育省がズールー語作品の出版を推進したことは、ズールー語作品の内容にどのような影響を与えたのだろうか。原住民教育主任視学官であったマルコムは、集まった原稿の評価を、教員であり、ズールー・ソサエティの事務局長を務めていたムパンザに依頼している。ムパンザがマルコムに当てて書いた評価書を検討し、実際に教科書として採用された書物の傾向を分析することで、ズールー語及びズールー文学・歴史という科目を通して何が教えられるべきだと期待されていたのかがわかる。大別すればズールー語で書かれた教科書に求められていたのは、言語としてのズールー語の純粋さ、保守的なジェンダー観、そしてズールー人の伝統という三点にまとめることができる。それではまず最初の二点をムパンザがマルコムに宛てた評価書から見よう。

評価書のなかで、ムパンザは W.W. ムセンガ (Msengana) が書いたノマシュワ (UNomashwa) という物語を酷評している⁽⁵⁶⁾。この評価書は、否定的であるがゆえに、教科書としての使用を想定して書かれたズールー語作品がどのような性格を持つべきと考えられていたかを、具体的に明らかにしているといえる。

第一点目の「純粋な」ズールー語という観点に照らして、ムパンザは、この原稿に見られるズールー語以外の単語を事細かにリスト化している。例えば、本文中に出てくる「彼らの子ども」は、“ulusha lwake”と記されているが、ズールー語では“abantwana bakhe”であり、また「話題」を意味するズールー語は“indaba”であるが、“ingxoxo”と記されていることを指摘して、ムパンザは、この原稿にはズールー語以外の単語（おそらくコーサ語と考えられるとムパンザは述べている）が含まれているため出版に値しないと述べる。コーサ語とズールー語の混合という問題は、この原稿以外にも見られる。ズールー語読本の出版を計画していたコーサ語地域の東ケープにあるラヴェール学院出版局は、ナタール州教育省のマルコムやチューニセンから、ズールー語読本で使用した単語について詳細なチェックを受けたことを、同校校長である R. H. W. シェパード (Shepherd) に伝えている⁽⁵⁷⁾。

言語の「純粋さ」を保つことに関する危機感は、ムパンザのような保守的なズールー人教員だけでなく、マルコムのような官僚も共有しており、教育省の基本方針となっていたことが分かる。しかし、アフリカ人教員にとって純粋なズールー語を保つことは、英語など他の言語や、ヨハネスブルクのような都市のスラングからズールー語を守るといった側面だけではなく、ズールー人のネイションとしての発展を示すものとして考えられていたのである。教員団体であるズールー・ソサエティは、その教育に関する要綱の中で、ズールー語による教育が初等レベルを超えて、中等・高等教育まで広がっていくことが、ズールー人が文明化の段階を登っていることを示す指標となっていると指摘する⁽⁵⁸⁾。この点において、ズールー語は、ベネディクト・アンダーソンの主張するモジュール（規格）としてのナショナリズムの一要素だと捉えることができるだろう⁽⁵⁹⁾。ただし植民地主義下でのズールーナショナリズムは、ズールー人エリートだけでなく、白人行政官、そしてエッセイ・コンテストを主催したキリー・キャンベルの兄ウィリアム (William) を含む資本家（砂糖プランター）との協力によって推進されたのである⁽⁶⁰⁾。このような協力関係は、ズールー語授業教材としての作品を、ズールー人エリートの間でのズールー・ナショナリズムの発露としてのみ読み取らせることをためらわずに十分な複雑さをもたらした。この点については

具体的な作品を分析する際に述べたい。

第二点目として、ズルー人の「伝統的な」ジェンダーに関する倫理（モラル）を教え込むことがこの教科には期待されていたことを指摘できる。送られてきた原稿『ノマシュワ』で描かれた主人公である架空の女生徒ノマシュワの行動と、彼女の母親が教師にとる態度を非難するムパンザの文面からは、ズルー人女性の「不品行（immorality）」を批判し、彼らの行動を規制しようとするズルー人エリートと行政官の思惑を読み取ることができる⁽⁶¹⁾。ムパンザは、登場人物の行動の問題点を次のように要約する。

ノマシュワは学校で教師と口論し、彼女の母親は学校で教員を名前で呼び [Sir, Miss などの敬称ではなく]、学校の規律を乱す。ノマシュワは恋愛沙汰に巻き込まれ、婚姻外の妊娠をし、子どもを産む。彼女がその後恋に落ちる少年は、もし責任ある大人（a responsible man）であるジェイムズ・マヴァ（James Mava）によって覆されるということがなかったら、彼女と結婚していたであろう⁽⁶²⁾。

アフリカ人エリート女子校であるイナンダ・セミナリーの歴史をたどったヘーリー・クレンシーの研究が述べるように、1920年代から40年代にかけて未婚の女子学生の妊娠に対して保護者と教員は懸念を抱き、婚外妊娠の増加という事態は伝統的ズルー社会の規律の低下と、学校が女子学生に新たに規律を与える組織として取って代わることに失敗していることの証拠とされた⁽⁶³⁾。ムパンザの懸念は、当時のジェンダー規範をめぐる議論を反映していたのである。学校におけるズルー文学・歴史教育は、行政官とアフリカ人エリートに共有されたこの保守的なジェンダー観が広がっていく回路であったと考えることができるだろう。

ムパンザの手紙から読み取れる上記二点に加えて、ズルー文学・歴史教育に期待された役割の三点目として、スチュアートの読本に関するシラバスの記述を引いて先に述べたようにズルー人の歴史と伝統を教えることが挙げられる。

委員会に送付された原稿が残されておらず、また原稿評価のやりとりもマルコムとムパンザの二人の間の手紙しか残されていないという史的な制約からズルー語出版の全容を明らかにすることは極めて難しいが、評価書及び実際に出版された教科書の内容からは、上記の三点を満たすことが出版の条件として重要だったと考えられる⁽⁶⁴⁾。

4. 教科書作家としての R.R.R. ジョモ

以上のような期待に最もよく応え、30年代半ばから指定図書としてその著作が広く学校教育で用いられた作家が R.R.R. ジョモ（R.R.R. Dhlomo）であった。ジョモの著作は、ズルー王家を題材とした三部作『シャカ（UShaka）』、『ディンガネ（UDingane）』、『ムパンデ（UMpande）』だけでなく、生活指導を中心としたズルー語の読本『今日の武器（Isikhali zanamuhla）』及び『知識は人を発展させる（Ukwazi … kuyathuthukisa）』も教科書として採用された⁽⁶⁵⁾。彼自身が『シャカ』の序文で述べるように、ジョモの歴史小説はズルー人の過去の精神を読者に伝えることを目的として書かれた⁽⁶⁶⁾。そしてまた彼の英語での小説『アフリカの悲劇（An African Tragedy）』が都市に移住したアフリカ人女性の墮落を描いていることから分かるように、ジョモ自身家父長的な権力を重視する保守的なジェンダー観の持ち主であった⁽⁶⁷⁾。

ジョモの歴史小説三部作は、ズルー人の過去を学生に伝えることを意図しているという点で、ズルー人自身によってズルー人の過去が描かれることを待ち望んでいたドークやマルコムな

ど白人の学者や行政官の期待に応えるものであった。ヴィッツ大学の言語学教授として、アフリカ言語の出版物の促進に尽力したドークは『シャカ』への緒言 (Isibingelelo [直訳としては「紹介」の意味がある]) において、スチュアートやソト人のモフォロなど、それまでズールー人以外の書き手によって描かれてきたシャカの時代がようやくズールー人によって書かれたことの重要性を指摘する⁽⁶⁸⁾。

文学におけるシャカ像の系譜をたどったゴランは、このようにジョモの作品が多く学校で教科書として使用されていたことを踏まえて、ジョモの作品が指定教科書としてだけでなく、ズールー人の歴史的知識の源泉としてもスチュアートの読本に取って代わったのだと指摘する⁽⁶⁹⁾。しかし、教科書が白人行政官のスチュアートの読本からズールー人の著作に置き換えられたことは、前者が影響力を失い、アフリカ人の視点から見た歴史が教えられるようになったと単純に結論することはできない。この事態はむしろ白人と黒人双方の歴史観のもつれとして捉える必要があるのである。

ジョモの『シャカ』は、この本以前に教材として使われたデュベの『ジャッケ:シャカの従者』やハガードの翻訳本『ナダ/シャカの支配』とは異なり、想像上の人物を主人公として彼らの人生を物語るのではなく、実在の人物シャカを主人公として彼の生涯を描くという構成を取っている。それゆえにジョモは、彼が歴史上の人物を物語るにあたって、彼らに想像上のセリフを語らせるのは、その時代の精神(慣習)を伝えるためであると弁明しなくてはならなかったのである⁽⁷⁰⁾。そして、ジョモが、彼が描いた歴史が事実に基づいていると主張するときの根拠となっているのが、「白人・黒人の両者によって書かれた書物」であった。それらの書物の中でも、ハミルトンとライトは、『シャカ』の各章を詳細に分析することで、ジョモが参照した書物の中でもスチュアートの読本に最も依拠していたことを明らかにしている⁽⁷¹⁾。またズールー人教員ポール・ラムラ (Paul Lamula) もズールー人の伝統を扱った『ズールー人の伝統 (Isabelo sikaZulu)』の末尾の謝辞において、スチュアートに言及し、ズールー人は、ズールー人の過去に関する話を収集したスチュアートに感謝すべきであると述べる。また彼の謝辞は、首長の頌詩 (praise poem (izibongo)) も含めたスチュアートの読本の内容が学校教育を通じてズールー語話者の間に膾炙していたことを裏付けている⁽⁷²⁾。ズールー語作家 B.W. ヴィラカジ (B.W. Bilakazi) が述べるようにスチュアートの読本自体にズールー人自身が歴史を書くことを促す効果があったのであり、ジョモやラムラの著作はその代表的な実例として考えることができるだろう⁽⁷³⁾。

ジョモやラムラが、スチュアートの読本に依拠して、自身の歴史書を書いていたことは、ズールー王国に関する歴史叙述の集まりとしてのアーカイブが、この流れは白人の系譜、この流れは黒人の系譜であるというように明確に分けることなどできない混交した状況にあるとする、ハミルトンとライトの主張を裏付けるものだ⁽⁷⁴⁾。ただし、『シャカ』への序文においてジョモがスチュアートやあるいはイギリス人冒険家ナサニエル・アイザックス (Nathaniel Isaacs) の旅行記を参照して書いていたことは、この小説をより事実に寄り添うものにするという意図があつてのことだろうと言語学者ドークが述べているように、白人の著作を引用することは、歴史叙述をより「客観的」に見せるための工夫でもあったとも考えられる⁽⁷⁵⁾。白人の著作を参考文献として用いることはまた、原住民教育主任視学官のマルコムに体现されるようなズールー史や文学の権威に寄り添い、また教育省におもねる意図も感じられる。例えば、先述したラムラの『ズールー

人の遺産』は、スチュアートへの感謝を末尾で述べるとともに、その序文でこの本をマルコムに捧げるとしている⁽⁷⁶⁾。

教科書としての採用を念頭に置いて、政府の権威とその方針に寄り添うことを強いられたのは、ラムラだけではなかった。R.R.R. ジョモの弟であり、自身も小説家であった H.I.E. ジョモは（ただし彼の執筆言語は英語である）、ズルー戦争時のズルー王を主題とした兄の歴史小説の原稿『チェツワヨ UCetshwayo』が教科書を選定する委員会で「人種的かつ宗教的」理由によって教科書としての採用を否定されたと指摘している。ジョモのそれ以前の三部作が全て教科書として採用されていることを考えれば、この決定は意外なものであり、H.I.E. の委員会の決定が大騒ぎを起こしたという主張もあながち誇張ではないかもしれない⁽⁷⁷⁾。教科書としての執筆ということで制約が生じたのは、政府への批判だけではなかった。ムパンザは、ハガードの『ナダ』を低学年向けに翻案した原稿について、当時相続の問題で揺れていたズルー王家の意向で採用が難しいと指摘する⁽⁷⁸⁾。それは、ハガードのこの小説が、自分の妻たちが男子を生んだ場合はその赤子を殺すように命じてきたシャカには実は生き延びた息子がいたと仮定して話を進めるという構図を持っていたからであろう。30年代半ばからズルー語教科書の著者は、ほぼズルー人で占められるようになったが、ズルー王家を焦点とする歴史叙述のスタイルは保持された。以下では、この時期にズルー王家を中心とした歴史叙述がどのように変化したかを考察する。

5. 日付のついた歴史：南アフリカ連邦形成史の中のズルー人の歴史

1930年代半ばから住民教育省（Department of Native Education）がズルー語での教科書の出版に積極的に介入し、出版プロセスをその管轄下に置いたことは、ズルー王家を中心とした歴史叙述の内容にどのような影響を与えたのだろうか。この問いを考えるにあたって、教育省、特に主任視学官であるマルコムの働きかけによって出版が促される1930年代半ば以前と、それ以後の二つの時期に出版された本の内容の相違に着目することで、ズルー語著作への教育行政の影響を考えたい。具体的には、南アフリカのアフリカ人の歴史全般を扱った歴史書という観点から、1922年に出版されたマゲマ・フゼの『黒い人々：彼らはどこから来たのか』⁽⁷⁹⁾と、1938年の A. I. モレフェ（Molefe）と T. Z. マソンド（Masondo）の共著『褐色の民族の起源と白人の到来について』⁽⁸⁰⁾を比較する。住民教育省の積極的な介入以前・以後という二つの時期をまたいで発表され、かつ同様の主題を扱ったこの二つの著作を比較することで、ズルー語での歴史叙述にもたらされた内容の差異が明らかになるだろう。

実際に、ズルー語話者の間では、これらの二つの本は同じ主題を扱っていると考えられていた。例えば、後に言及する小説『ハリスデールの相続人』の著者である E.H.A. マデ（Made）は、後者が前者の「歩んだ道をたどる（kuhamba ezinyathelweni zikaFuze）」ものであると述べる⁽⁸¹⁾。しかし両者の間には、ナタール州及び南アフリカ全体におけるアフリカ人統治政策への見解において、相違が存在する。また、その見解の違いに結びついた形で、いかに歴史を語るのかという叙述の方向性においてもこの2つの歴史書は大きく異なる。以下ではこの点を明らかにするために政府に対する見解、及び叙述の仕方を中心に両者を比較する。

5.1. フゼ『黒い人々』

ズルー人によってズルー語で書かれた初めての本の著者として知られるマゲマ・フゼ

(Magema Fuze) は、アフリカ人の権利の擁護者として入植者の間では悪名高かったイギリス人宣教師ジョン・コレンゾ (John Colenso) がズールー人を対象として開いたエクカンエニ (Ekukhanyeni)、光のある場所 (あるいは、啓蒙の場所) と名付けられた学校で学び、また同校で印刷工として働いた。そのためフゼの歴史叙述には、ミッション・エリートとしての、そしてコレンゾの弟子としての意識が色濃く反映している。フゼの詳細な伝記研究を発表したショニパ・モコエナは、そのタイトルを『マゲマ・フゼ: コルワ知識人の形成』とした⁽⁸²⁾。コルワ (Kholwa) とは、「信じること (ukukholwa)」という動詞に由来し、キリスト教に改宗したアフリカ人を指す言葉として20世紀半ばまで用いられた。モコエナは、識字という植民地化と宣教によって新しくもたらされた能力ゆえに、フゼや他のコルワたちは、19世紀から20世紀初頭にかけてアフリカ人の観点に立った知的伝統を作り出すことを目指す集団として、自分たちを意識していたと主張する⁽⁸³⁾。

フゼのこの著作は、フゼが序文で述べるように宣教団や政府の助成に頼ることなくアフリカ人の友人からの資金的援助で出版された⁽⁸⁴⁾。この点は、フゼの叙述が政府の干渉から比較的自由であったことを示すとともに、コルワたちが、ナタールに住むアフリカ人の過去に対する関心を共有していたことを明らかにしている。フゼは『黒い人々』の序文で、「この本を学校に通う子どもたちに読んでもらい、彼らの知らない自分自身の由来を知ってもらいたいと思う人は多いはずだ」⁽⁸⁵⁾と書き、この本がアフリカ人の過去を保存し、広めるという目的があることを明確にする。しかし、ズールー歴史エッセイ・コンテストが「部族」の歴史を保存することを求めていたのに対して、フゼの歴史書はズールー王家を中心としつつも、奴隷制によって散らばったブラック・ディアスポラをも射程に含むものになっている。さらにズールー王家の歴史を描く際も、歴代の王のみを語るのではなく、彼らと白人政府との交渉・戦闘の過程を白人政府への批判を含めながら書いているのである。このような対象の広がりや批判的な観点は、首長ランガリバレレ (Langalibalele) や、ズールー王チェツワヨ (Cetshwayo) 及びデヌズールー (Dinuzulu) など反逆罪に問われてきたアフリカ人指導者を擁護してきたコレンゾ家と深く関わり⁽⁸⁶⁾、バンバタの反乱に乗じて植民地政府の転覆を図ったという罪でセントヘレナ島に幽閉されていたズールー王デヌズールーに伴ない同島に渡り、王の二人の息子の家庭教師を務めたというフゼ自身の経験が関係しているのだろう⁽⁸⁷⁾。

フゼの『黒い人々』は、セントヘレナ島での元奴隷との交流⁽⁸⁸⁾や、アフリカ人を南下したユダヤ人として捉える聖書の字義的解釈⁽⁸⁹⁾など興味深い論点を多く含む。しかし、本論文の観点から重要だと考えられるのは、ズールー王家の描き方である。アフリカ人統治政策の文脈では、シャカに代表されるズールー王は強権的な独裁者として捉えられるのに対して、フゼは征服した「部族」の首長を殺すように求めたのはシャカ自身ではなく取り巻きであったと述べ⁽⁹⁰⁾、またディンガネによる北上してきたアフリカーナーの殺害についても、彼自身を罠に嵌める計画を見破ったためだ⁽⁹¹⁾として、様々な紛争・殺害の原因を、ズールー王自身の残虐性ではなく、その他の要因に求めている。さらに、1879年のズールー戦争時の王チェツワヨについても、戦争を正当化する目的でチェツワヨを暴虐的君主と描く植民地政府のプロパガンダに対して、「個人的に知っている限りでは、チェツワヨは、臣民を愛す良い君主であり、えこひいきと不公平を嫌い、間違いを犯したものを公然と批判し、一貫した行動をとる人物であった」とその性格を賞賛している⁽⁹²⁾。

さらに、フゼの歴史叙述には、このような個人的経験やズルー人の中での口承伝統を、白人によって書かれた書物よりも有力な資料として提示する工夫がなされている。フゼは、ナサニエル・アイザックス、イギリス人の探検家ヘンリー・フィン (Henry Fynn) のような冒険家の著述や、彼自身の教師コレンゾがズルー語で書いた『ナタールの出来事』(Izindaba ZaseNatal) などの書物を引きながら、それぞれのズルー王の統治の下で起こった出来事を記述していく。しかし、それらの資料で示された見解は、白人から見た歴史として括られる。フゼは、ズルー語原著の第37章を、「白人によって語られたシャカの出来事 (zindaba zika'Tshaka (ngokutsho kwabelungu))」と題し、叙述の視点が白人側にあることを明確にしている。そして、その後に自身の経験やアフリカ人の中での言い伝えをより権威のあるものとして提示する。例えば、シャカが、実の母親がシャカの息子を隠した際、怒りで母親を殺したというズルー人の中での言い伝えを取り上げることができる。母親は病気で死んだと言っているフィンに対し、フゼは、ズルー人はこのように大切な秘密を白人に伝えるだろうか、と疑問を呈し、シャカが母ナンディ (Nandi) を刺したのではないかと述べている⁽⁹³⁾。このようにフゼは、アフリカ人の経験に立った叙述を行い、さらにその叙述が白人の著作より優れていることを主張するのである。

このように、内容的にも、叙述スタイルという点においても植民地政府やその立場に寄り添った歴史書に批判的なフゼの本が、アフリカ人教育の教科書として指定されていたこと自体が不思議であるが、おそらくはズルー語による歴史書の不足が原因でフゼの『黒い人々』は実際に1934年の教員資格第4級の科目であるズルー文学・歴史の教科書として指定されていた⁽⁹⁴⁾。しかし、フゼの『黒い人々』は資料から分かる限りでは、この一年のみの指定で終わっている。次にフゼの著作と対比させる形で、同じくズルー人の通史を対象とするモレフェとマソンドの『褐色の民族の起源と白人の到来について』の叙述を検討することで、ズルー語による歴史叙述への教育省介入の影響を明らかにしたい。

5.2. 「主任視学官に大いに感謝いたします (Siyabonga kakhulu...uMhloli OMkhulu)」: 教育省介入のズルー語歴史教科書内容への影響

モレフェとマソンドはその序文においてマルコムへの感謝を示す。「私たちは、助言をくれた友人、特に主任視学官である D. マック・マルコム氏 - 彼の助力のおかげで私たちの仕事は出版されることになったのです - に感謝いたします」⁽⁹⁵⁾と。ただし、1930年代から40年代にかけてズルー語で書かれた教科書を読むとき、マルコムへの感謝の言葉に必ずと言って良いほど出会うため、この謝辞は、モレフェとマソンドに特有のものではない。しかし、フゼの著作と比較するとき、彼らの著作は原住民教育行政の影響を明らかに示している。

モレフェとマソンドの著作『褐色の民族の起源と白人の到来について』は、ズルー王を中心とする叙述を行っている点では、フゼの著作と同様であるが、植民地支配や間接統治に時に批判的な言及を行うフゼに対して、モレフェとマソンドは白人支配によってもたらされた変化を肯定的に捉える結論を提示している。例えば、彼らは、「黒人の進展 (Inqubekela phambili yabasundu)」と題する章において、白人による植民地化後の黒人の進展を、宣教師によるキリスト教の到来から、政府による病院の建設まで様々な事例を列挙しているが、フゼに見られたような白人政府に対する批判的な姿勢は見られない⁽⁹⁶⁾。さらに本の結論部分においてモレフェとマソンドは、白人政府は連邦に、発展 (intuthuko) をもたらしたとしてその存在を肯定する⁽⁹⁷⁾。

モレフェとマソンドの著作の目的は、南アフリカ連邦という国家の形成の歴史の中に、同国に住むアフリカ人の歴史を位置付けることにあり、この点は、本書の構成によく表れている。彼らは、アフリカ人の南下を説明した後、ズールー人の歴史をシャカからソロモンまで続く、ズールー王を中心としたナラティヴとして叙述する。その後が続くのは、ソト人、ツワナ人、コーサ人など各民族の簡略な歴史と、南アフリカ戦争（ボア戦争）など南アフリカ全体の通史である。これらの歴史的叙述を終えた後、著者たちはミッション・リザーブやロケーションなど政府によって定められた土地の形態を説明する。

そして、このような内容面での相違は、叙述の仕方の相違としても表れている。フゼの著作は、記述される出来事が起こった年・日付が記されていないことに対して読者に驚かないように注意を促しているのに対して⁽⁹⁸⁾、モレフェとマソンドの著作は、日付の付いた歴史（年譜的歴史）-それはフゼによるならばヨーロッパ人の到来によってもたらされた歴史に対する認識のあり方なのであるが-として南アフリカのアフリカ人の歴史を語ろうと試みる。この点が明確に表れているのが、彼らが巻末に付した付録であり、ここでは、ズールー人の歴史、その他のアフリカ人民族の歴史に加え、連邦形成の歴史における重要な出来事が、年表形式でまとめられている⁽⁹⁹⁾。このような語り方の相違は、モレフェとマソンドの著作が、植民地社会の形成というメタナラティヴを背後に持つ南アフリカ連邦の成立と発展の歴史の一部としてズールー人の、またアフリカ人の歴史を語ろうという試みであることを示している。

そして、ズールー文学・歴史という科目において、モレフェとマソンドの共著が教科書として使われたという事実は、この歴史観を支持する読み方が促されたことを想定させる。それは、この教科書に対する試験問題からも明らかである。例えば1943年の教員資格試験の問題は、1879年のズールー戦争について、この戦争がもたらした利点と弊害をそれぞれあげてを要求する⁽¹⁰⁰⁾。この問題の作成者であった先述のムパンザは、解答として、弊害としては戦争後、ズールーランドの主権が失われたこと⁽¹⁰¹⁾を、利点としては同地に白人の「文明化/啓蒙された生活(enlightened life-style)」が入ってきたことを第一に挙げるように求める⁽¹⁰²⁾。それゆえに、この本の読者である教員候補者たちは、白人支配の南アフリカという現実を肯定する視線を持ち込む形でズールー人の歴史を読むことを余儀なくされたと考えられる。

モコエナは、フゼのズールー語新聞『イランガ』での記事と『黒い人』の受容の過程を検討し、フゼの歴史叙述がズールー語話者に彼らの歴史を議論する言論の場を開いたと主張する⁽¹⁰³⁾。しかし、1930年代以降の教育省の介入の強化によって、ズールー語で歴史を書き・読むという、その行為自体が、書き手と読み手の歴史意識とともに、「伝統」を利用したアフリカ人統治行政の意図に絡み取られていくというプロセスの一部に変容したのである。

第3節 ズールー文学・歴史科目における試験問題による読み方の規定

ズールー語教科書における解釈の幅とその縮減

前節では、ナタール州のアフリカ人教育行政の意図に沿う教科書が出版される過程を辿った。ただし、教科書として採用されることを想定して書かれたということが、すなわち、ズールー人作家が書いた著作が白人政府の意向に寄り添ったものであるということの意味するわけではない。教科書として使用された作品のいくつかは、マークスが述べるような抵抗と恭順がないませ

となった「曖昧さ (ambiguities)」⁽¹⁰⁴⁾や、ピーターソンの指摘するナラティブにおいて対立項を象徴的に両立させる役割を果たす「アレゴリー (allegory)」⁽¹⁰⁵⁾の存在を示している。

ジョモの歴史小説は、ズールー人の過去を伝えるという点で、まさにマルコムやドークなど専門家の期待に応える本となっている。一方で、弟のH.I.E. ジョモは、歴代のズールー王を主題とした兄R. R. R. ジョモの歴史小説は、ズールー人の歴史における過去の偉大な人物を描くことで「民族解放(National Liberation)」に貢献すると論じている⁽¹⁰⁶⁾。またピーターソンも、R. R. R. ジョモの歴史小説の中でズールー王が、独裁者／殉教者 (tyrant-martyr) という両義性を持った存在として描かれていると指摘する。すなわち、ズールー王は、強権的な統治を敷く独裁者でありながら、白人との接触後は、アフリカ人の独立と尊厳を守るために犠牲的な勇敢さを示す人物として提示されているのである⁽¹⁰⁷⁾。

このような解釈における両義性は、マデの同時代を舞台とする小説『ハリスデールの相続人 (Indlalifa yaseHarrisdale)』に明確に表れている⁽¹⁰⁸⁾。この小説は、白人家庭で働いて得た資金で自身の農場を持ち成功した父親と、父親の資産で良い教育を受けたものの働くことを嫌がり都市で放蕩する息子に対比的に描いた後、結末で息子の改心と親子の和解を描いている。南アフリカにおけるアフリカ研究の代表的な学術誌『バンツー研究』に掲載された書評において、ズールー人詩人・小説家のヴィラカジはこの小説を、白人のアフリカ社会への影響という現代の課題に取り組んだものとして高く評価する。ヴィラカジにとってこの小説が明らかにするのは、黒人差別の現実であり、「教育を受けたアフリカ人 (educated Africans)」の苦境である⁽¹⁰⁹⁾。一方で、マルコムはこの小説を、白人と黒人との協力、アフリカ人居住地として割り当てられたリザーブの経済的発展、そして出稼ぎのために一時的に滞在していたとしても、最終的には都市を離れて農村に帰ることの重要性を説いた物語として説明する⁽¹¹⁰⁾。この大きく解釈が異なる二つの要約に示されるように、父親と息子との間の「文化の衝突」⁽¹¹¹⁾を描いたマデの小説は、様々な読解の可能性に開かれた物語として捉えることができる。

しかし、この本を学校教育で利用された教科書として読むという状況を考えるとその解釈の可能性は狭まる。この本を対象として実施されたズールー史・文学の試験問題から、この本がいかに読まれるべきだと考えられていたかを検討しよう。1941年の原住民教員資格第4級試験 (Fourth Class Certification Examination) では、『ハリスデールの相続人』に関する問題⁽¹¹²⁾は次のように始まる。

物語は、ムントウカジワ [父親] が小規模の土地を買ってもらうことから始まる。これは誰のアイデアであったか、またこの土地を買ってもらった事はどのような展開をもたらしたか？この物語全体が私たちに教えようとしているのは何か？ “Isisusa sendaba yokuba UMuntukaziwa athengelwe isiqintshana sezwe saqala kubani, sahamba kanjani? Yonke lendaba iqonde ukusifundisani?”

この問題の想定される答えはムントウカジワの白人の隣人ハリスが、今まで彼の農場で働いてきたムントウカジワをねぎらうために、ムントウカジワに土地を買い与えた。そして、その土地を農地にすることでムントウカジワは (息子を全寮制の学校に送るまでに) 成功したというものであろう。

さらに1944年のこの小説に関する問題⁽¹¹³⁾は、次のように学生に問う。

5. 次の文にあげた文から一文を選び、そこから始まる物語について述べなさい。

(a) 俺が牛追いをするだって？そんな仕事俺らには向いてないよ、つまり教育を受けたやつってことだけど。[(b) 以下、省略]

“5. Xoxa indaba eqondene nelilodwa kulamazwi: ---

(a) “Ngiqhube izinkomo mina? Qha, awusifanele lowomsebenzi thina zifundiswa…””

アフリカ人の少年が伝統的に行うべき仕事と考えられている牛追いを拒否するような傲慢さが、息子であるテングスウェ (Thengiswe) が無職にとどまっている理由であることが示唆されている問題である。

そして、この年の試験の最後の問題は、受験者に、次の引用への例証を挙げることを要求する。

すべての白人が黒人を軽蔑しているわけではない。ハリス氏のこの言葉の証明となる出来事をあなたが読んだこの本『相続人』から取り出して、説明しなさい。

“7. Kukusibo [sic. Kakusibo] bonke abeLungu abenyanya abaNtu.” Fakaza lelizwi lika Mn. Harris ngendaba oyifunde kwezeNdlafa.”

これらの問題とそれに対する答えは、この小説を一定の立場から読むことを促すものだ。それは、白人との協調であり、勤労の大切さであった。学生たちは決して、この小説から、ヴィラカジがこの小説に見た「偏った南アフリカ (biased South Africa)」⁽¹¹⁴⁾への批判を読み取ることを期待されてはいなかったのである。

このように教科書として採用された著作が特定の読み方を期待されていたということは、ピーターソンが指摘するような文化的抵抗としての小説のあり方を否定するものではない⁽¹¹⁵⁾。しかし、試験のために本を読むことは問題の作成に関わったマルコムやムパンザのような保守的な政治的見解を持つ人々の暗黙の要請に応えることでもあったのである⁽¹¹⁶⁾。1944年のズルー史・文学の試験官であった、ムパンザは『相続人』に関する問題において、学生たちの回答は満足のいくものであったとマルコムに報告している⁽¹¹⁷⁾。試験でうまくいくこと (going well) は、その試験中だけであれ保守的な志向を持った人々 (“Hamba kahle”: 英語の直訳は go well であるが、「慎重に歩む」のニュアンスから保守的な立場を取る人々を指すようになった) に同調することであった⁽¹¹⁸⁾。この点において、ズルー史・文学という科目は、ズルー人の文化と歴史を題材として保守的な立場が浸透していく回路であったということが出来る⁽¹¹⁹⁾。

試験問題が、特定の読み方を学生に課すという事態は小説だけでなく、歴史書においても当てはまる。モレフェとマソンドの『褐色の民族の起源と白人の到来について』に関する問題は、ズルー人の歴史を南アフリカ連邦の歴史の一部としてみる見方を補強する。それは白人支配を、アフリカ人の発展をもたらすものとして捉える見方である。例えば、先に述べたように1943年の教員資格問題の一つは、1879年のズルー戦争がズルーランドに居住する人々にもたらした変化の良い点と悪い点を述べるように学生に要求する⁽¹²⁰⁾。この問題を作成したムパンザは、マルコムに宛てた報告書において、この問題の正解として、悪い点としては、主権が失われたこと、そして未だに取り戻していないこと⁽¹²¹⁾を挙げ、良い点としては、「文明化された生活」がもたらされたこと、そして政府によってズルー人同士の内戦が止められたことを挙げるべきであると指摘する⁽¹²²⁾。この問題に十分に答えることは、教員になろうとするズルー人の学生に、白人の影響がズルー王国に及ぼされるにつれて、人々の生活が蒙昧な状態から進歩するという大きな物語を肯定することを要求するのである。

次年度1944年の問題は、より直裁的に白人政府の貢献を述べるように求める⁽¹²³⁾。

彼らのお金が政府に取られているが、このお金は何に役立っているのかと言う人々がいる。このような人々への回答として、10の例を挙げて並べなさい (Kukhona Abantu abathi imali lena ethelwa eMbusweni ithelelwani. Hlela izihlko zibe yishumi zokuphendula lababantu.)

南アフリカ連邦の歴史の中でズールー人の歴史を教えることは、すなわち白人政府の慈善を強調することであったのだ⁽¹²⁴⁾。

おわりに

本論文は、ズールー語で歴史を書くこと、そして書かれた書物を読むことという二つの行為の持つ意味をナタール州におけるアフリカ人教育との関連において検討してきた。具体的には、ズールー文学・歴史という科目において、教科書がいかにかかれ、また読まれるべきだと考えられていたかを検討することで、教科書として採用されたズールー語の歴史書・文学書を読むことと、保守的な政治的立場とのつながりを明らかにした。第1節で述べたようにズールー・ナショナリズムに関する研究においてはシュース・マークスの「依存の曖昧さ (ambiguities of dependence)」の議論が、大きな影響力を及ぼしてきた。アフリカ人エリート(伝統的あるいはミッション教育を受けた)と白人行政官・実業家・政治家といったアフリカ人統治行政に関わる人々との従属関係を対象とするマークスの概念は、人種隔離政策の計画とその実施を分析する際の重要な視角として、多くの研究が言及してきた。

ズールー人知識人に関するこれまでの研究は、個人の思想に注目して、ズールー史に関する議論とそこに見られる政治姿勢を綿密に精査してきた。それに対して、本論文は、王家を中心としたズールー・ナショナリズムが浸透する場であったズールー文学・歴史という科目に注目することで、歴史的な議論を支える制度とそこでの集合的な行為としての読解を検討してきた。その結果として、次のように言うことができるだろう。第一に、ズールー文学・歴史という科目は、ズールー・ナショナリズムが保守的なズールー人と白人行政官の協力のもとに人種隔離政策に親和的な形に組み替えられた上で浸透する回路であった。第二に、そのようなズールー・ナショナリズムの浸透の回路は、原住民教育を担う行政の介入によって、マークスの主張するような「曖昧さ」を縮減したのである。たしかに、マークスの主張する「曖昧さ」は、彼女が検討した個人レベルでは明確に見られる。しかし、白人行政官とズールー人保守的エリートが協働しズールー・ナショナリズムの教育を通じた浸透を企図するという本論文が対象としたより制度化された側面においては、「曖昧さ」には制約が課されていたのである。

さらに、「曖昧さ」の縮減という考え方は、民族の分断を基礎とする人種隔離政策への活用が可能である一方で抵抗の基礎ともなりうるズールー人意識を強調する統治体制が、なぜ長期間にわたって維持されてきたのかを理解する上で重要な視点を提示する。ズールー・ナショナリズムそれ自体は、20世紀初頭の反乱を分析した研究が示すように、植民地支配への抵抗の基盤にもなり得る。しかし、1930年代以後ズールー王家を中核とするズールー・ナショナリズムは、南アフリカ国内においては人種隔離体制の保持と強化にむしろ結び付けられてきた。20世紀後半のズールーランド、特にインカタの支配を分析した歴史学者テンビサ・ウォーツィアンは、インカタのイデオロギー的基礎を家父長制と伝統的権威の組み合わせとしてまとめている。すなわち、ズー

ルー人家庭においては、家父長 (umnumzane) が女性と年少者を監督し、家父長の権威は、ヘッドマン・首長・王家というピラミッド階層の下部に位置付けられることで保障されるのである⁽¹²⁵⁾。本論文がこれまで検討してきたズールー文学・歴史という科目は、1930年代・40年代に教授内容・教科書が整備されていくことで、このイデオロギーが学校教育を介して広がっていく、その制度的な基盤となっていったと考えることができるだろう。ズールー人の過去の栄光を記録すること、また苦境に直面しつつも努力によって乗り越え発展していくこと、歴史書と小説が提示するこれらの中心的な内容には、少数派の白人によって支配された現状への批判にではなく、むしろ現状を肯定し、人種隔離政策の下で創られた「伝統」の保持と見せかけの自立を享受することへと読者を向かわせることが期待されていたのである。

注

- (1) Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986); Shula Marks, "Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness," in *The Creation of Tribalism in Southern Africa*, ed. Leroy Vail (Berkeley: University of California Press, 1989).
- (2) Bhekizizwe Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals* (Trenton, NJ: Africa World Press, Inc., 2000); Bhekizizwe Peterson, "Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948," in *The Cambridge History of South African Literature*, ed. David Attwell and Derek Attridge, (Cambridge: Cambridge University Press, 2012), 291-307; Carolyn Hamilton, Bernard Mbenga, and Robert Ross, "The Production of Preindustrial South African History," in *The Cambridge History of South Africa Vol.1* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010), 39.
- (3) 死亡者数については、Jill E. Kelly, *To Swim with Crocodiles: Land, Violence, and Belonging in South Africa, 1800-1996* (East Lansing, Michigan: Michigan State University Press, 2018), xxvii. を参照
- (4) 代表的な研究としては以下を挙げるができる。David John Welsh, *The Roots of Segregation: Native Policy in Colonial Natal, 1845-1910* (Cape Town: Oxford University Press, 1971); Jeff Guy, *Theophilus Shepstone and the Forging of Natal: African Autonomy and Settler Colonialism in the Making of Traditional Authority* (Scottsville: University of KwaZulu-Natal Press, 2013); Nicholas Cope, *To Bind the Nation: Solomon KaDinuzulu and Zulu Nationalism*. (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1993).
- (5) 代表的な研究としては、以下を参照。Shula Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa: Class, Nationalism, and the State in Twentieth-Century Natal* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986); Carolyn Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998); Thembisa Waetjen, *Workers & Warriors: Masculinity and the Struggle for Nation in South Africa* (Cape Town: HSRC Press, 2006).
- (6) Michael R. Mahoney, *The Other Zulus: The Spread of Zulu Ethnicity in Colonial South Africa* (Durham, NC: Duke University Press, 2012).
- (7) Helen Bradford, *A Taste of Freedom: The ICU in Rural South Africa, 1924-1930*. (New Haven: Yale University Press, 1987).
- (8) Cope, *To Bind the Nation*.
- (9) Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*.

- (10) Mahoney, *The Other Zulus*; Bradford, *A Taste of Freedom*.
- (11) Cope, *To Bind the Nation*, 193-97.
- (12) Mahoney, *The Other Zulus*.
- (13) Hlonipha Mokoena, "An Assembly of Readers: Magera Fuze and his *Ilanga Lase Natal* Readers," *Journal of Southern African Studies* 35, no. 3 (September 1, 2009): 595-607.
- (14) Paul La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities: Signatures of Nationalism, Zulu Ethnicity and History in the Lives of Petros Lamula (c. 1881-1948) and Lyomn Maling (1889-c.1936)* (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 2000).
- (15) Peter Kallaway, "Bibliography of Materials Relevant to the Study of Education in the Colony of Natal, the Province of Natal and KwaZulu-Natal, 1839-1994: Selected with Special Attention to 'Native Education,'" *Journal of Natal and Zulu History* 30, no. 1 (January 2012): 107-38.
- (16) 上林朋広, 「南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容」『歴史評論』792号 (April 2016): 46-60.
- (17) バンバタの反乱に関しては、Sean Redding, *Sorcery and Sovereignty: Taxation, Power, and Rebellion in South Africa, 1880-1963* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2006), chap. 4. アメリカ黒人が飛来し、南アフリカから白人を追い出すというICUと結びついた予言に関しては、Robert Trent Vinson, *The Americans Are Coming!: Dreams of African American Liberation in Segregationist South Africa* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 2012).
- (18) ズールー語ラジオ放送については以下の二つの文献を参照。Elizabeth Gunner, *Radio Soundings: South Africa and the Black Modern* (Cambridge: Cambridge University Press, 2019); Thokozani Ndumiso Mhlambi, "Early Radio Broadcasting in South Africa: Culture, Modernity & Technology" (Ph.D. Thesis, University of Cape Town, 2015), <https://open.uct.ac.za/handle/11427/17260>. ズールー語ラジオにおける歴史物語を文字化したものとして、Hubert Sishi, *Imilando YakwaZulu: Imidlalo Yomsakazo* (Pretoria: University of South Africa, 2000). 戦時下のラジオ放送における白人政治家のイジボンゴの放送については、ズールー・ソサエティ文書に残された、スマッツやフランクリン・ローズベルトなどのイジボンゴを参照 (Box 11 IV/5/7 Izibongo, Zulu Society Papers, Pietermaritzburg Archives Repository of the National Archives, South Africa. (以下 ZSP/PMB)).
- (19) Charles Mpanza Personal Papers, ZSP/PMB.
- (20) N.B.J. Sabelo, "Makanya Clan," Zulu Tribal History Competition 1942 Papers. File 3, Killie Campbell Africana Library, University of KwaZulu-Natal Durban (以下、KCAL).
- (21) このエッセイ・コンテストの実施状況、及び応募されたエッセイの概要については、上林朋広「ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策：創られた「伝統」の変容・浸透・放棄の過程」(博士論文、一橋大学社会学研究科、2020)、第5章を参照。
- (22) N.B.J. Sabelo, "Umthambo wabukhosi kwakwa "makhanya" --- nezigigaba zombuso wakhona." Zulu Tribal History Competition 1950 Papers. File 15, KCAL. 英語の構文と比較が容易になるように、意図的にズールー語の構文を守って直訳した。訳文で「氏族」とした *isizwe* は多義的な語であり、英語では nation, tribe, clan があてられている。D. McK Malcolm et al., eds., *English-IsiZulu = IsiZulu-English Dictionary*, Fourth edition, with revised orthography (Johannesburg: Wits University Press, 2014), 1250. ポストアパルトヘイト時代におけるズールー・エスニシティの解体の可能性を説くブテレジは、*isizwe* は現在のズールー語において「南アフリカ人」、その中の一つのエスニック集団である「ズールー人」、さらに共通の祖先を持つと考えられる

- 集団（名字を共有していることが多い）の三つの意味で使われていると指摘する。Mbongiseni Buthelezi, "Heritage vs Heritage: Reaching for Pre-Zulu Identities in KwaZulu-Natal, South Africa," in *The Politics of Heritage in Africa: Economies, Histories, and Infrastructures*, ed. Derek R. Peterson, Kodzo Gavua, and Ciraj Rassool, (New York, NY: Cambridge University Press, 2015), 172.
- (23) From N. B. J. Sabelo to Daniel Mck. Malcolm, 30th August, 1950. N.B.J. Sabelo, "Umthambo wabukhosi kwakwa "makhanya" --- nezigigaba zombuso wakhona." Zulu Tribal History Competition 1950 Papers. File 15, KCAL.
- (24) ズールー歴史エッセイコンテストにおける、言語選択の状況については上林「ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策」第5章を参照。
- (25) D. McK Malcolm et al., eds., *English-IsiZulu = IsiZulu-English Dictionary*, 4th ed. (Johannesburg: Wits University Press, 2014).
- (26) 白人ズールー語学習者の立場から、ズールー語学習の歴史を辿った研究書として、Mark Sanders, *Learning Zulu: A Secret History of Language in South Africa* (Princeton: Princeton University Press, 2016) がある。
- (27) グギ・ワ・ジオンゴ『精神の非植民地化：アフリカ文学における言語の政治学』宮本正興・楠瀬佳子訳、増補新版（第三書館, 2010）。
- (28) C. T. Loram, *The Education of the South African Native* (London: Longmans, Green & Co, 1917). 南アフリカ教育史におけるロラムの役割については以下を参照。R. Hunt Davis, "Charles T. Loram and an American Model for African Education in South Africa," *African Studies Review* 19, no. 2 (1976): 87-99.
- (29) Loram, *The Education of the South African Native*, chap. 10.
- (30) Loram, chap. 11.
- (31) マルコム退任時に、アフリカ人教員の一人ムティムクル (Mtimukulu) は、ナタール州のアフリカ人教育において「ロラムが建築家 (architect) であったとすれば、マルコムは建造者 (builder) であった」と述べる。南アフリカ原住民教育雑誌 (Native Teachers' Journal, 以下 NTJ) のマルコム原住民教育主任視学官退任時の特集号の記事を参照。"Appreciations of D. Mck. Malcolm," *NTJ*. Vol. 24 no.3, April 1945, 66.
- (32) この二点をマルコムがロラムから継承したという点については、Andrew John Moore, "Natal's 'Native' Education (1917-1953): Education for Segregation" (MA Thesis, University of Natal, Durban, 1990), 50を参照。
- (33) D. M. Malcolm and C. T. Loram, "Notes of a Lesson on the Study of Zulu," *NTJ* 1, no. 2 (January 1920): 43-44.
- (34) C. M. Doke, "A Preliminary Investigation into the State of the Native Languages of South Africa with Suggestions as to Research and the Development of Literature," *Bantu Studies* 7, no. 1 (January 1933): 1-32.
- (35) Doke, 14. ただし、ドークはマゲマ・フゼ (Magema Fuze) が1922年に刊行した歴史書『黒い人々 (Abantu Abamnyama)』には言及していない。
- (36) Doke, 14.
- (37) 学校で使用されたズールー語教材の変遷については、上林「ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策」巻末の教科書リストを参照。
- (38) スチュアートは、1920年代に5冊の教科書をズールー語で執筆し、全てロンドンの出版社 Longmans Green and Co. から出版した。uTulasizwe (1923年、対象学年スタンダード4), uHlangakula (1924年、ス

- タンダード6), uBaxoxele (1924年スタンダード7及び教員資格レベル6), uKulumetule (1925年スタンダード8, 9及び教員資格レベル5), uVusezakiti (1926年、スタンダード3)である。スチュアートが収集したインタビューは現在 James Stuart Archives として6巻本にまとめられている。James Stuart, Colin de B. Webb, and John B. Wright, *The James Stuart Archive of Recorded Oral Evidence Relating to the History of the Zulu and Neighbouring Peoples*, 6 vols. (Pietermaritzburg: Natal University Press, 1976-2014). この記録集の形成過程については以下の文献を参照。John Wright, "Making the James Stuart Archive," *History in Africa* 23 (January 1996): 333-50; Carolyn Hamilton, "Backstory, Biography, and the Life of the James Stuart Archive," *History in Africa* 38 (2011): 319-41.
- (39) Natal Education Department, "Primary Syllabus for Use in Government and Government-Aided Native Schools," 1936, 44. ただし、教科書の使用学年は、"Zulu Readers for 1930," *NTJ*, Oct. 1929 vol.9 no.1, 47に従い、タイトルのスペリングは実際に出版された教科書に従い修正した。
- (40) 学生数に関しては、Natal Department of Education, *Report of the Superintendent of Education for the Year 1931* (Pietermaritzburg: Government Printer, 1931), 34表 (b) より筆者が再集計した。残念ながら1931年以降の統計を入手することはできなかった。1931年のズルー語教科書として指定された本については、以下を参照。Natal Education Department, "Department Notice," *NTJ* 9 no.1, 47.
- (41) 例えば、ハガードの最も著名な小説『ソロモン王の鉱脈』を論じた、Anne McClintock, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest* (New York: Routledge, 1995), 1-4. を参照
- (42) Stephen Coan, "Dube's Only Novel Is a Modern Classic," *News24*, April 8, 2009, <https://www.news24.com/Archives/Witness/Dubes-only-novel-is-a-modern-classic-20150430>.
- (43) Brian Willan, *Sol Plaatje: A Life of Solomon Tshekisho Plaatje, 1876-1932*, African Lives Series, no. 10 (Sunnyside, Auckland Park, South Africa: Jacana Media, 2018), 376-78.
- (44) Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 118-24. 本文の読解を支えるパラテキストに着目した研究として Corinne Sandwith, "History by Paratext: Thomas Mofolo's Chaka," *Journal of Southern African Studies* 44, no. 3 (May 2018): 471-90.
- (45) H. Rider Haggard, *Umbuso kaShaka*, trans. F. L. Ntuli (Mariannhill, Pinetown: Mariannhill Mission Press, 1979).
- (46) 「それゆえ、この本を読んで私はあなたに次のように言うことができる。ズルー人の土地に住む人々の感性を持った白人である故ライダー・ハガード卿によって書かれた『ナダ：百合の女』と呼ばれる本書はうまくズルー語に訳されており、彼は私たちが本当に強靱であると、私たちの力強さを賞賛し、激賞している」"Lokhu ngikusho emva kokufunda incwadi enhle ayihumushile ngesiZulu ebizwa ngokuthi "Nada The Lily" eyalotshwa umufi uSir Rider Haggard, umLungu owayenozwela ngesizwe sakwaZulu, esidumisa ebabaza namandla aso, ethi siqotho siqinile." Dube "Isishayelelo" in Haggard, *Umbuso kaShaka*.
- (47) Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 119-20.
- (48) H. Rider (Henry Rider) Haggard, *Nada the Lily*, 1998, <http://www.gutenberg.org/ebooks/1207>.
- (49) Dube "Isishayelelo" in Haggard, *Umbuso kaShaka*.
- (50) "Departmental Notes and Notices," *NTJ* 16, no.4. (July 1936): 96.
- (51) ただし、教科書の入れ替えの背景としては、ズルー語の正書法の変化も重要な要因であった。Hamilton, *Terrific Majesty: The Powers of Shaka Zulu and the Limits of Historical Invention*, 162.
- (52) 1911年のセンサスでは連邦全体で、7パーセントのアフリカ人が識字能力ありと判断され、1935年の人種

- 関係研究所の調査では650万のアフリカ人のうち12パーセントが識字能力ありとされている。Meghan Healy-Clancy, *A World of Their Own: A History of South African Women's Education* (Scottsville: University of Kwazulu-Natal Press, 2013), 89.
- (53) D. Mck Malcolm, "Zulu Literature," *Africa* 19, no. 1 (January 1949): 39.
- (54) ケープ植民地におけるエリート校であったラブデール校の出版局を対象とした研究としては、Jeffrey Peires, "The Lovedale Press: Literature for the Bantu Revisited," *History in Africa* 6 (1979): 155-75を参照。
- (55) Sue Krige, "Segregation, Science and Commissions of Enquiry: The Contestation over Native Education Policy in South Africa, 1930-36," *Journal of Southern African Studies* 23, no. 3 (September 1997): 491-506.
- (56) Mpanza to Malcolm, 2nd Dec. 1939, Box 15, VII/2 Letters to Malcolm, ZSP/PMB.
- (57) W. B. Benuce to Rev. Shepard. 11th Sep. 1939 MS16343(h), Lovedale Papers, Cory Library, Rhodes University.
- (58) Zulu Society "Memorandum for the Provincial Education Commission on Native Education," Box 8 IV/2/3 Papers re Chief Inspector of Native Education, ZSP/PMB.
- (59) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Rev. ed (London; New York: Verso, 2006), chap. 7.
- (60) Cope, *To Bind the Nation*.
- (61) 保守的なズルー人エリートと白人行政官のジェンダー規制をめぐる強調の事例としてマークスは、ズルー人女子学生の伝統的ダンス禁止を挙げている。Marks, "Patriotism, Patriarchy and Purity," 225-30. しかし、このようなジェンダー観はズルー人伝統主義者に限られたものではなく、ナターシャ・イーランクが述べるように、ANC 活動家を含めた20世紀前半のアフリカ人エリートの多くに見られるものである。Natasha Erlank, "Gender and Masculinity in South African Nationalist Discourse, 1912-1950," *Feminist Studies* 29, no. 3 (2003): 653-71.
- (62) Mpanza to Malcolm, 2nd Dec. 1939, Box15, VII/5 Letters to Malcolm, ZSP/PMB.
- (63) Healy-Clancy, *A World of Their Own*, 107.
- (64) 本文で述べたように史的な制約からズルー語教科書出版の全体のプロセスを明らかにすることは非常に難しいが、ズルー・ソサエティを中心に残された史料からは、基本的に以下のプロセスを辿ったと推察できる。
- a. 著者がズルー土着語委員会へ原稿を送付
 - b. マルコムが審査をズルー人教員（史料からわかるのはムパンザのみ）に依頼
 - c. ムパンザが評価を書いてマルコムに返送
 - d. 委員会が出版可否の決定
 - e. 教育省とのつながりのある出版社（Shuter&Shooter）か、宣教団の出版局（Mariannahill Mission Press）が出版を準備
 - f. ズルー語を解する白人行政官が原稿の校正を行う（e.g. ズルーランドの白人行政官カール・ファイエ（Carl Faye）による R.R.R. ジョモの著作『知識は人を発展させる』（Ukwazi kuyathuthukisa）の校正）
 - g. 出版後、ナター州教育省が教科書として指定
- なお、残された原稿が他にないので一般化はできないが、ファイエの修正指示は、語句の入れ替え・スペリングに限定されており、内容に踏み込むものではなかった。"Proofs of Ukwazi kuyathuthukisa by R.R.R. Dhlomo," Carl Faye Papers Box 10, File21 and 22, Pietermaritzburg Archives Repository of the National

Archives, South Africa. 内容面への介入は、校正の段階ではなく、教科書を選定する権限を持っていた原住民教育主任視学官であるマルコムを中心とするズールー地域土着語委員会から著者へという形でなされたと推測できる。

- (65) 採用された年度と学年については、上林「ズールー・ナショナリズムと人種隔離政策」巻末の教科書リストを参照。
- (66) Dhlomo, “Amazwana Omlobi Walamaxoxo,” R.R.R. Dhlomo, *UShaka* (Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1937).
- (67) R.R.R. Dhlomo, *An African Tragedy* (Alice: Lovedale Press, 1928).
- (68) Doke, “Isibingelelo,” Dhlomo, *UShaka*.
- (69) Dafnah Golan, *Inventing Shaka: Using History in the Construction of Zulu Nationalism* (Boulder, Colo: L. Rienne, 1994), 78.
- (70) Dhlomo, “Amazwana Omlobi Walamaxoxo,” *UShaka*.
- (71) John Wright and Carolyn Hamilton, “‘Black’ Histories, ‘White’ Histories, ‘Mixed’ Histories? Perspectives from Zulu Historiography” (July 5, 2001). Paper presented at the Conference “‘The Burden of Race: ‘Whiteness’ and ‘Blackness’ in Modern South Africa’” at Wits University.
- (72) Petros Lamula, *Isabelo sikaZulu* (Pietermaritzburg: Lincroft Books, 1967), 214. 原文は以下の通りである。「私は、ズールー人はJ. スチュアート氏の尽力によく感謝すべきであると考え。彼は、私たちの物語を収集し、また首長の頌詩（イジボンゴ）を整理し、それらを本にまとめることに尽力した。私自身、彼の集めた頌詩と彼の本が築いた道から出てきたとも考えられ、そのため私は彼に十分に感謝することなどできない。なぜなら、他の学生と同様に彼の本にすっかり馴染んでしまっているのだから。実際、従わなかった少数の例外こそあるが、私は〔この本で〕彼の集めた頌詩に従った（“Ngithi kuhle isizwe sibonge imizamo ka-Mnu. J. Stuart, ozame ukubhala izincwadi eziphethe izindaba zakithi, wahlela nezibongo zamakhosi. Kangithandanga nami ukuba ngiphume emkhondweni wezibongo ezisezincwadini zakhe, ngoba sezijwayeleke kakhulu nasezinganeni zezikole. Ngempele-ke khona ezibongweni ngilandele yena nje, noma kukhona kancane lapho ngiyeke khona.”）」
- (73) B. W. Vilakazi, “Some Aspects of Zulu Literature,” *African Studies* 1, no. 4 (1942): 274.
- (74) Wright and Hamilton, “‘Black’ Histories, ‘White’ Histories, ‘Mixed’ Histories? Perspectives from Zulu Historiography,” 22.
- (75) Doke, “Isibingelelo,” Dhlomo, *UShaka*.
- (76) Lamura, *Isabelo sikaZulu*, 214. マルコム自身はラムラの前著『マランデラの息子ズールー（UZulu kaMalandela）』に対して、内容が植民地支配に反発するものであったことから、否定的な書評を書いている。D. Mck. Malcolm, “Our Library Table,” *NTJ* 5 no.2 (1926): 41-2. 『マランデラの息子ズールー』の受容に関しては、La Hausse de Lalouviere, *Restless Identities*, 103-7を参照。
- (77) H. I. E. Dhlomo, “Three Famous African Authors I Knew : R. R. R. Dhlomo,” *English in Africa* 2, no. 1 (1975): 11. この記事で、ジョモは選定委員会（the Selection Committee）とのみ記しているが、教科書採用の判断をするという委員会はズールー地域土着語委員会（Zulu Regional Vernacular Commission）であったため、同様の委員会を指していると考えられる。
- (78) Mpanza to Malcolm 6 Oct. 1941, Letters to Chief Inspector of Native Education, III/4, ZSP/PMB. ズールー王家の継承問題と、この問題へのズールー・ソサエティの関わりについては以下の文献を参照。Marks,

- “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness” ; Antony Costa, “Custom and Common Sense,” *African Studies* 56, no. 1 (January 1, 1997): 19-42.
- (79) 原著は、M. Fuze, *Abantu Abamnyama: Lapa Bavela Ngakona*, Ise ng' eyokuqala (Pietermaritzburg: City printing works, Limited, 1922) である。編者によって構成を変更されているが、英語での翻訳 Magma M. Fuze, *The Black People and Whence They Came*, trans. Harry C. Lugg (Pietermaritzburg: University of Natal Press, 1979) も出版されている。
- (80) A. I Molefe and T. Z Masondo, *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu* (Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1938).
- (81) Emman H. A Made, *Ubuwula Bexoxo* (Pietermaritzburg: Shuter & Shooter, 1945), 155.
- (82) Hlonipha Mokoena, *Magma Fuze: The Making of a Kholwa Intellectual* (Scottsville: University of KwaZulu-Natal Press, 2011).
- (83) Mokoena, 17-24.
- (84) Mokoena, 201-2.
- (85) Fuze, *The Black People and Whence They Came*, v.
- (86) コレンゾ家とこれらアフリカ人指導者をめぐる論争については、Jeff Guy, *The Heretic: A Study of the Life of John William Colenso 1814-1883* (Johannesburg: Ravan, 1983).
- (87) フゼの伝記的事実については、Mokoena, *Magma Fuze* を参照。
- (88) Mokoena, 140-61.
- (89) Hlonipha Mokoena, “‘The Black House’, or How the Zulus Became Jews,” *Journal of Southern African Studies* 44, no. 3 (May 4, 2018): 401-11.
- (90) Fuze, *The Black People and Whence They Came*, 105.
- (91) Fuze, 170.
- (92) Fuze, 105.
- (93) Fuze, *Abantu Abamnyama*, 79. “Kepa uMbuyazwe weTeku (Mr. Fynn) uyakupika loko, uyaqinisa ngempela, uti, inkosikazi yabe igula iruda igazi. Asazi-ke lapo ukuti yikupi okuy'isiminya. Kodwa umuntu angangabaza, mhlaumbe, ati, “Konje umlungu Iona abakwa'Zulu babengahle bantshele isifuba sakubo kona kwakwenzekile loko na ?” Mina ngibona ukuti wamgwaza ngempela.”
- (94) “Department Notice,” *NTJ* Oct. 1933 Vol.13 no.1, p.37.
- (95) “Siyababonga kakhulu abahlobo bethu abasilulekayo, ikakhulu uMhloli Omkhulu wezikole uMnu. D. McK. Malcolm okunguyena ophumelise umsebenzi wethu.” Molefe and Masondo, *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu*, sec. Amazwi Okuqala.
- (96) Molefe and Masondo, 152-58.
- (97) Molefe and Masondo, 176-80.
- (98) Fuze, *The Black People and Whence They Came*, vii.
- (99) Molefe and Masondo, *Ezomdabu wezizwe zabansundu nezokufika nokubusa kwabelungu*, 181-88.
- (100) “Izimpi zihle zimbi. Yabanhle ngani kwelaseSouth Africa impi yasOndini (4 July, 1879)? Yabambi ngani?” Education Department, Natal. Native Teachers' Fourth Class Certificate (T.4) Examination 1943. Box 15, VII/5 Letters Dispatched to the Chief Inspector of Native Education, 1939-1945, ZSP/PMB. 以下の試験問題は、全てこのファイルに収蔵されている。

- (101) “Ngokuwa kwobukhosi bakwaZulu, ubuzwe bukaZulu baphela, nanamuhla uZulu kabumbene.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature.
- (102) “Inhlalo yokukhanya, nokungenqeni, nokuzisebenzela, nokwenza okuthandwa yinlizyio, leyafika nezizwe ezimhlophe, yathola ithuba lokungena phakati kweNdlwemnyama e-South Africa, seluphelile uvalo lokuvinjazelwa vimpi yoSuthu olumpondonde.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature. “inhlalo yokukhanya” を、“enlightened life-style” として訳すべきであると指摘してくれたショニパ・モコエナに感謝。
- (103) Mokoena, “An Assembly of Readers.”
- (104) Marks, *The Ambiguities of Dependence in South Africa*, 2.
- (105) Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*, 8.
- (106) Dhlomo, “Three Famous African Authors I Knew,” 12.
- (107) Peterson, “Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948,” 302.
- (108) Emman H. A Made, *Indlalifa Yase Harrisdale*, Rev. ed (Pietermaritzburg: Shuter and Shooter, 1974). (初版1940年)
- (109) B. W. Vilakazi, “BOOK REVIEWS,” *Bantu Studies* 14, no. 1 (January 1940): 201-3.
- (110) Malcolm, “Zulu Literature,” 38-39.
- (111) Peterson, “Black Writers and the Historical Novel: 1907-1948,” 209.
- (112) Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T, 4) Examination, 1941.
- (113) Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T, 4) Examination, 1944. Zulu History and Literature.
- (114) Vilakazi, “BOOK REVIEWS,” 202.
- (115) Peterson, *Monarchs, Missionaries & African Intellectuals*, 17.
- (116) 試験問題の作成は、科目ごとに任命された教員が作成し、その後主任視学官であるマルコム承認を得るという形式で進められた。Malcolm to Mpanza, September 30, 1942. Box15, VII Letters from Chief Inspector of Native Education, ZSP/PMB.
- (117) Examiner’s Report Zulu History and Literature, Native Teachers’ Fourth Certificate, 1945. Charles Mpanza Personal Papers, Box 16, VII/6/3 Mpanza Examiner’s report, ZSP, PMB.
- (118) ズールー人保守派 (Hamba kahle) としてのジョン・デュベについては、La Hausse, *Restless Identities*, 79-82.
- (119) 教育行政が人種隔離政策に親和的な読解を学生に期待していたということは、当然ながら、実際に学生が期待通りに読んだということを意味しない。対抗的な読みの可能性は常に開かれていると考えるべきであろう。例えば、ズールー人知識人セルビー・ムシマン (H. Selby Msimang) の生涯を分析した博士論文において、ムキゼは『ハリスデールの相続人』を、父親が息子の相続者としての資格を試すために、都会での困難にわざと直面させる物語として要約しており、白人の協力や悪場所としての都市という教科書的読解とは異なる読み方を提示している。Sibongiseni Mthokozisi Mkhize, “Class Consciousness, Non-Racialism and Political Pragmatism: A Political Biography of Henry Selby Msimang, 1886-1982” (Ph.D. Thesis, University of Witwatersrand, 2015), xix. ただし、この博士論文を元にした研究書では、『ハリスデールの相続人』への言及はあるものの上記の要約は削除されている。Sibongiseni M. Mkhize, *Principles and Pragmatism in the*

Liberation Struggle: A Political Biography of Selby Msimang (Cape Town: BestRed, 2019), vii.

- (120) “Izimpi zinhle zimbi. Yabanhle ngani kwelaseSouth Africa impi yasOndini (4 July, 1879)? Yabambi ngani?” Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination 1943.
- (121) “Ngokuwa kwobukhosi bakwaZulu, ubuzwe bukaZulu baphela, nanamuhla uZulu kabumbene.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature.
- (122) “Inhlalo yokukhanya, nokungenqeni, nokuzisebenzela, nokwenza okuthandwa yinlizyio, leyafika nezizwe ezimhlophe, yathola ithuba lokungena phakati kweNdlwemnyama e-South Africa, seluphelile uvalo lokuvinjazelwa yimpi yoSuthu olumpondonde.” Outlines of Answers and Scheme of Marking, Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination, 1943. Zulu History and Literature.
- (123) Education Department, Natal. Native Teachers’ Fourth Class Certificate (T.4) Examination 1944. Zulu History and Literature.
- (124) ムパンザは次の12項目を回答例として記している。「学校教育と本、道路、警察、法廷、病院、農家、橋、病気（人）、家畜の病気、水、注射、家畜の検疫 (Imfundo nezincwadi zayo, imigwaqo, amaphoyisa, izinkantolo, izibedlela, abalimi, amabuloho, izifo, imfuyo, amanzi, imijovo, amadiphu ezinkomo.)」 Outline of answers of scheme of marking. Native Teacher’s Fourth Class Certificate (T.4) Examination, Zulu History and Literature. Charles Mpanza Personal Papers. Examination Questions and Answers. Box 16, VII/6/1. ZPS/PMB.
- (125) Waetjen, *Workers & Warriors*.

[査読を含む審査を経て、2021年5月12日掲載決定]

(日本学術振興会特別研究員)